

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成21年5月号

平成二十一年五月一日発行 第十九巻第五号 通巻第二一五号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# 桜守

高橋将夫

とりたてて賞罰はなし桜守  
浮いてきてすぐには亀も鳴けぬなり  
雪解けの水の流るる雪の下  
水底の影を曳きずる花筏

鳥の来る枝を残して剪定す  
なんとでもなる剪定の枝の形  
秋風をいまだ知らざる風車  
風車好きも嫌ひもなく廻る  
塞翁が馬に乗りたる春野かな  
突進は頭を下げて春の犀  
海市から目が離せなくなつてきし

# 槐安集

水野恒彦

春夕焼拐かどほかされし子の記憶  
野火果てて老ひとも大き夜空あり  
亀鳴くと人體図よりオーラ立つ  
鏡には映ることなき海市かな  
恋猫や海峡に月のさまよふも

延広禎一

枝振りを上げ紅梅の若木かな  
沖へ行く二頭の駱駝海市立つ  
鐘撞くや黄砂をまとふ音のして  
雨音を花音かのんと言へる櫻守  
かひやぐら空艚漕からろぎをるをとかかな



加藤みき

寒明や作品展の準備中  
春服のこよなく似合ふ別れかな  
法要のさなか赤子のこゑうらら  
明るくて肌をさす風春障子  
春寒や寝衣は白をもてなせり

石脇みはる

絵馬奉納天神さんの梅三分  
穂の芽やくれなみに空明けにける  
摂津をちこち猫柳皮を脱ぐ  
身に添ひしシルクの春のワンピース  
こだはりは豆腐の苦汁にがり水温む

中島陽華

淡雪や男山より案内状  
噴く飯盒逆さにしたり春の山  
菜の花や天が下なる畝傍山  
人間のころ吸うては赤海鼠  
寒柝の音の高きに達磨かな

竹内悦子

極寒の蘇民祭のふどしかな  
遠き日の色紙いろいろ冬桜  
初午の神馬と女占師  
退屈しんにようをもて余しゐる春の泥  
足しんにように首は黄道初櫻

栗栖恵通子

逆剥けの指が痛うて猫の恋  
曲水や黄楊櫛厚しすべらかし  
デコポンの臍のあたりのやる気かな  
春一番背振りの神の一途にて  
春満月駱駝の瘤のたぼたぼと

大島翠木

豆拾ふ鬼しみじみと生きて来し  
余生なり靴先にある露の臺  
春はあけぼの志功天女の伏目かな  
啓蟄や今日の水撒く伝馬町  
丸四角ピカソの女花に紛れ

雨村敏子

あかときの一水流る焼野かな  
じつちやまの髭で遊ぶ子春隣  
外づらのよき鬼ども遣らひけり  
蛇行せる二ヶ月の川ヴェイシュヌ神  
春氷たしかに気骨あけにける

本多俊子

生きるとは影のあることあたたかし  
木の扉開けば亀の鳴きにけり  
佗助や俄かに夕空濡れてくる  
水匂ふとき白椿落ちにけり  
太平洋の霞に三千世界あり

小形さとる

ものの芽のたのしき数をかぞへけり  
春夕焼陵<sup>みづせ</sup>は足冷ゆるなり  
大綿や筆禍流罪といふがあり  
春霖の暈の色<sup>はた</sup>の別れかな  
畦焼いてしばらく波の傍<sup>はた</sup>にあり

久津見風牛

雪吊りに遊びありけり男結ひ  
風花や稲株白く乾く音  
手も足もなき春雲に君は乗り  
柳絮飛ぶ笑つて逃げてそれそこに  
すずしろの花に錫杖とまりたる

近藤 きくえ

佐保姫のハミング交へ小川かな  
如月の雲水風をきつてくる  
石路の絮春一番といづこかへ  
異国よりメール届きぬ春の虹  
室出しの真白き独活の産毛かな

近藤 喜子

こころもち猫背に春の立ちにけり  
真昼間の寂しくなりぬ春の猫  
記紀の世のたましひの白鳥帰る  
天の磐戸ひらきし花菜明りかな  
チンギスハン駆けてゆきたる黄沙かな

谷村 幸子

投函のポストの温し白い雲  
旅姿の西行笑まふ鳥雲に  
見通して二月河内の国見山  
菜の花のひと叢にくる日照雨かな  
木の馬を撫でてなめらか風光る



# 槐市集

松原仲子

磨かれし丸太に亀の鳴きにけり  
命ひとつ野に遊ばせてゐたりけり  
雲雀鳴く水輪のひかり近寄せて  
桃の日の潮うしを入りくる水えくぼ  
陽炎にたはむれてゐる孔雀かな

松本桂子

砂敷いて箒で字かく涅槃西風  
山茱萸の花のまはりに雨の来し  
露味噌をたべてもひとり一人かな  
春うららウツ病のくすり減つてをり  
蝌蚪の毬水より掬へば流れさう

柳川晋

春泥やおつとあご引け背ナ伸ばせ  
向き合ふに薄水ほどのわだかまり  
うちの子ぢやないさあたいは通ひ猫  
古びたる浮名を雛の舟に入れ  
我が父祖の口の数ほど田螺鳴く

吉田順子

春天や遠き火の山猛りをる  
老成の枝に炎の牡丹の芽  
人声の満ちし三極花明り  
眼薬の一滴をさし目借時  
オリオンも早やうるみたる弥生かな



# 槐集

## 高橋将夫選

山笑ふ響きを盃に受けとむる 守口 柳川 晋

客観の主観にとけて桃の酒

狛犬が吠と呑み込む臍かな

おおぞらへ魔羅つき出して春岬

望潮しおふるたま干珠たまを振り翳す

張りつめしこころあやふし春水 枚方 富松 寛子

夢殿のまあるき春をめぐりけり

言霊のきらきらひかる冬木の芽

露の臺風の切つ先まるまろし

観音経の延命十句寒明くる

皓歯より熱き言の葉春動く 谷岡 尚美

如月の光と思ふ一語かな

一の午一の峰まで御神酒かな

しばらくは見惚るる少年寒夕焼

春月や白洲正子の白き袴

水といふ光にじませ牡丹雪 東京 西村 純太

料峭の粟田口より一騎落ち

冴返る心の奥の修羅の景

磔刑の硝子絵に添ふ春の雪

むら霞浄土と修羅の夢違ひ

春は曙笑壺に入りし鳥のこゑ 奈良 瀬川 公馨

初春の笑ひぶくろが千五郎

正月や青鼠軍団あらひぐま

Gメンの世界を股に草萌ゆる

生業の冥土の飛脚鬼やらひ

裸木の空掃くごとし風日和 枚方 中野 京子

ひと目づつすくふ針目や春隣

春立つやまはす一会の万華鏡

五風十雨花菜をつみて漬けにけり

春風や明るき窓のはめ殺し

# 銀河往来 高橋将夫

客観の主観にとけて桃の酒 柳川 晋

酒を呑んでいると、現実から夢の世界に入ってしまった。それは、いふなれば客観が主観に溶け込んでいくような感じだった。桃の酒で客観が主観に溶け込んだ。桃の花を見ながら好きな酒を呑んでいて、ふとそんな思いに駆られたのだろう。桃の酒は、もともと客観を主観に溶かしたもののなかもしれない。

〈山笑ふ響きを盃に受けとむる×狛犬が吠と呑み込む臍かな〉  
等、今回の五句は力のある句がそろっていると感じさせられた。

張りつめしこころあやふし春氷 富松 寛子  
緊張の糸は、長く続くとプツリと切れる。たしかに、春氷にはそんなあやうさも感じられる。

〈観音経の延命十句寒明くる 寛子〉

如月の光と思ふ一語かな 谷岡 尚美  
例えれば「如月の光のような一語」なのである。きつと目から鱗の一語なのだろうが、どんな一語か聞くのは無粋。そっとしておこう。

磔刑の硝子絵に添ふ春の雪 西村 純太  
磔刑（たっけい＝はりつけの刑）の硝子絵は、例えば、十字架のキリストが描かれたステンドグラスか。春の雪がついた硝子絵に私は春の光と救いを感じた。

春は曙笑壺に入りし鳥のこゑ 瀬川 公馨  
「笑壺（えつぼ）に入る」は思い通りなって喜ぶこと。何の鳥かは知らないが、春は曙の鳴き声なのである。王朝の雅の世界。  
〈生業の冥土の飛脚鬼やらひ 公馨〉

春立つやまはす一会の万華鏡 中野 京子  
万華鏡の美しい模様は回すと次々に変化して華麗な世界が転回される。そんな華やかな世界に一期一会の世界を見た作者の感性に感心した。なるほど、美しい模様との出会いもまた一期一会の縁。

水底の目覚むる音や春の川 竹中 一花  
万物の目覚める春。大地ではなく静かな川底に目をむけ、そのかすかな命の目覚めの音に耳を傾けている作者の姿が浮かんでくる。

手文庫を開ければ触るる春の闇 近藤 紀子  
暗がり得手文庫を開けたら闇に触れた。気がつけば、あたりは春の闇につつまれている。こわい情景だが、出てきたのが白い煙でなくてよかった。

この域を脱し切れなき田螺かな 岩月優美子  
田螺は動いてもその範囲は狭い。なるほど、その域を脱し切れなれないといえる。もとより、作者はその域をとっくに脱しているはずだが。

（以下略）